

Umāsvāti に帰せられる 4 つのシュラーヴァカ・ アーチャーラ文献

堀 田 和 義

1. はじめに

ジャイナ教には在家信者の行動規範を扱う「シュラーヴァカ・アーチャーラ文献（以下、ŚĀ 文献）」という文献群がある¹⁾。これらは在家信者の 5 つの小誓戒 (aṇuvrata, または anuvrata), 3 つの徳戒 (guṇavrata), 4 つの学習戒 (śikṣāvrata) や 11 階梯 (pratimā) などを論じており, 出家修行者と在家信者との関係を緊密なものにして, インドで生き残るうえでも大きな役割を果たした²⁾。白衣派と空衣派の両派から権威を認められている Umāsvāti (空衣派では Umāsvāmin) 作の *Tattvārthadhigamasūtra* (TAAS) 第 7 章も在家信者の行動規範を扱っており³⁾, 広義の ŚĀ 文献と呼ぶことができる。この Umāsvāti に帰せられる ŚĀ 文献は他にも 3 つ残されているが, 本稿ではこれらの文献を比較し, Umāsvāti の著作問題を考えるうえでの一材料を提供することを目的とする。

2. 4 つの文献の概要

まず, 本稿で扱う TAAS, *Praśamaratiprakaraṇa* (PRP), *Sāvayapannatti* (ŚrPr), *Umāsvāmiśrāvākācāra* (Śr(U)) を概観する。これらのうち, TAAS のみ両派が権威を認めており, PRP, ŚrPr は白衣派, Śr(U) は空衣派に属する。TAAS には白衣派のみ権威を認める自注と Siddhasenagaṇin や Haribhadra の複注がある。一方, 空衣派では Pūjyapāda の注釈 *Sarvārthasiddhi* (T(P)) が最も古く, その影響のもとに多くの注釈が著された。白衣派の PRP, ŚrPr には Haribhadra 注が残されており⁴⁾, また ŚrPr はプラークリット語で書かれている点が他の文献と異なる。そして Śr(U) は唯一の空衣派文献で, 477 の詩節から成る。

3. 各文献の比較

ここでは, 在家信者の徳戒・学習戒の内訳, 誓戒の名称, 12 誓戒以外の項目

(220) Umāsvāti に帰せられる 4 つのシュラーヴァカ・アーチャーラ文献 (堀 田)

という 3 つの点に基づいて、各文献を具体的に比較する。

3. 1. 徳戒・学習戒の内訳

小誓戒は出家修行者の大誓戒 (mahāvratā) と遵守のレベルのみが異なり、内訳にはほとんど異論がないが、徳戒と学習戒の内訳には出入りが見られる。TAAS の徳戒は、方位に関する誓戒、場所に関する誓戒、無意味な毀損に関する誓戒の 3 つ、学習戒は、サーマーイカ行に関する誓戒、〈布薩〉の精進に関する誓戒、消耗品と耐久品とに関する誓戒⁵⁾、布施に関する誓戒の 4 つであり⁶⁾、PRP と空衣派の Śr(U) も同様である⁷⁾。しかしながら、白衣派の ŚrPr は、徳戒を方位に関する誓戒、消耗品と耐久品に関する誓戒、無意味な毀損に関する誓戒の 3 つ、学習戒をサーマーイカ行に関する誓戒、場所に関する誓戒、〈布薩〉の精進に関する誓戒、布施に関する誓戒の 4 つとする。

3. 2. 誓戒の名称

TAAS, T(U), PRP では、ŚrPr, Śr(U) のように徳戒、学習戒と呼ぶことなく⁸⁾、両者をまとめて「良習慣 (śīla)」と呼んでいる⁹⁾。また、〈布薩〉の精進に関する誓戒の〈布薩〉に相当する原語は TAAS の白衣派版本で pauṣadha, 空衣派版本で proṣadha となっているように宗派によって異なるが、白衣派の PRP, 空衣派の Śr(U) でも、各宗派の伝統に従っている。細かい違いはその他にも見られるが、ここでは術語の違いによる影響が最も大きいと考えられる耐久品と消耗品に関する誓戒の原語に注目したい。TAAS では upabhogaparibhoga [vrata], PRP では upabhoga-pārimāṇya, ŚrPr では uvabhogaparibhoga-parimāṇakaraṇa, Śr(U) では bhogopabhoga-saṃkhyā という語を用いる。ŚĀ 文献において、この誓戒の原語は TAAS, ŚrPr のように upabhoga + parabhoga を用いるものと bhoga + upabhoga を用いるものと大きく分かれる。そしてそれぞれの語は厳密に定義されるのが一般的で、両者の間では upabhoga の語義が逆になるため、同一人物が両方を使用した可能性は低い¹⁰⁾。また PRP も、upabhoga の一語で bhogopabhoga を表現したとも考えられるが、やはり例外的な表現と考えられる。

3. 3. 12 誓戒以外の項目

その他にも ŚĀ 文献では、12 誓戒以外の行動規範に言及することがある。TAAS, Śr(U) は 12 誓戒の後に断食死 (saṃlekhanā, もしくは sallekhanā) を追加している¹¹⁾。PRP も断食死に言及するが、その前に寺院の建立と香、花輪などを用いた礼拝に言及し¹²⁾、ŚrPr も断食死の前に日常の礼拝や寺院参詣に触れている¹³⁾。

4. むすび

以上に検討したように、TAAS と完全に一致するものは見られない。もちろん、同一人物の手になるものであっても、様々な事情により異なった術語を使用することや考え方が変化することもあると考えられるため、性急に結論を下すことはできない。しかしながら、少なくとも本稿で扱った在家信者の行動規範を材料として見た場合には、これらの文献の著者が同一人物であることを積極的に示すような材料は得られない。今後もさらなる材料を揃えて、より多角的に検討すべき課題であろう¹⁴⁾。

1) Jaini [1979] p.161 等を参照。

2) Mitra [1954] の説を批判的に継承した Jaini [2001] は、インド仏教衰退の要因の一つとして「在家信者を十分に教化しなかったこと (Insufficient cultivation on the laity)」を挙げる。

3) 本稿では、宗派を区別せず *Tattvārthādhigamasūtra* 一般を指す場合に TAAS と呼ぶ。

4) 1940 年に S. D. Lalbhai Jaina Pustakoddhara Samstha (Surat) から出版された版本には Haribhadra 注がついているとされるが筆者未見。また Haribhadra 注のほかに、著者不明の注釈に関する情報もある。これについては、以下の URL を参照。

<http://www.jainworld.com/jworg03/ioj/Prasamarati%20Prakarana.htm> (2012 年 7 月 26 日閲覧)

5) この誓戒の原語の bhoga と upabhoga (もしくは upabhoga と paribhoga) に相当するような日本語はないが、本稿では仮に bhoga + upabhoga の bhoga を「消耗品」、upabhoga を「耐久品」、upabhoga + paribhoga の upabhoga を「消耗品」、paribhoga を「耐久品」と訳す。

6) 白衣派版本のテキストは以下の通り。digdeśānarthadaṇḍaviratisāmāyikapauśadhōpavāsopabhogaparibhogātithisaṃvibhāgavratasaṃpannaś ca//T(U) 7.16. 一方、空衣派版本ではストロ番号、テキストの読みが多少異なる。digdeśānarthadaṇḍaviratisāmāyikaprośadhōpavāso-pabhogaparibhogaparimāṇātithisaṃvibhāgavratasaṃpannaś ca//T(P) 7.21.

7) digvratam ūrdhvaṃ deśāvakāśikam anarthaviratim ca//PRP 303cd

sāmāyikam ca kṛtvā pauśadham upabhogapārimāṇyam ca/

nyāyāgataṃ ca kalpaṃ vidhivat pātreṣu viniyojyam//PRP 304.

8) uḍḍhamahe tiriyaṃ pi ya disāsu parimāṇakaraṇam iha paḍhamam/

bhaṇiyaṃ guṇavvayaṃ khalu sāvagadhammammi vīreṇa//ŚrPr 280 (中略)

sikkhāpayam ca paḍhamam sāmāiyam eva tam tu nāyavvam/

sāvajjeyarajogāṇa vajjaṇāsevaṇārūvam//ŚrPr 292

aṇuvratāni pañca syus triprakāram guṇavratam/

śikṣāvratāni catvāri sāgārāṇām jināgame//Śr(U) 331

ただし、ŚrPr の学習戒に相当する語は“sikkhāpaya”であり、Haribhadra 注が示してい

(222) Umāsvāti に帰せられる 4 つのシュラーヴァカ・アーチャーラ文献 (堀 田)

るように、サンスクリット対応語が “śikṣāpāda” の可能性も考えられる。

9) vrataśīleṣu pañca pañca yathākramam/T(U) 7.19 (空衣派版本のストラ番号は 7.24)

yaś ceha jinaṣvaramate grhāśramī niścitaḥ suviditārthaḥ/

darśanaśīlavratabhāvanābhir abhirañjitaṣaṁkṣāḥ//PRP 302.

10) 各文献 (もしくはその注釈) における両語の定義は以下の通りである。upabhogaparihogavratam nāmāśanapānakhādyasvādyagandhamālyādīnām ācchādanaprāvaraṇālamkāraśayanāśanagrhayānavāhanādīnām ca bahusāvadyānām varjanam/T(U); upabhujyata ity upabhogah, aśanādīḥ, upaśabdasya sakṛdarthatvāt sakṛd bhujyata ity arthaḥ/ paribhujyata iti paribhogo vastrādīḥ, punaḥ punaḥ bhujyata iti bhāvaḥ/ŚrPrV on ŚrPr 284; snānabhojanatāmbūlamūlo bhogo budhaiḥ smṛtaḥ/ upabhogas tu vastrastribhūṣāśayāsānādīkaḥ/Śr(U) 434.

11) mārāṇāntikīm saṁlekhanām joṣitā/T(U) 7.17 一方、空衣派版本では読みやストラ番号が異なる。mārāṇāntikīm saṁlekhanām joṣitā/T(P) 7.22 Śr(U) は第 450 詩節以下を参照。また ŚĀ 文献では、断食死を学習戒に含める文献も多い。

12) caityāyanaprasthāpanāni kṛtvā ca śaktitaḥ prayataḥ/
pūjās ca gandhamālyādhivāsadhūpapradīpādyāḥ//PRP 305
praśamaratinityatṛṣito jinagurusādhujanavandanābhīrataḥ/
saṁlekhanām ca kāle yogenārādhyā suvisuddhām//PRP 306.

13) ŚrPr 第 343 詩節以下を参照。

14) 本稿では触れなかったが、Śr(U) には、Pūjyapādaśrāvākācāra とまったく同文の箇所も見られるため、この文献との先後関係にも注目する必要がある。しかしながらその前に、この文献の作者とされる Pūjyapāda が T(P) の著者と同一人物であるのかどうかといった点なども明らかにしなければならない。その他にも本稿とは異なった角度から同様の問題を扱ったものとして、Williams [1963] pp.1–3, Bronkhorst [1985] 等を参照。また ŚrPr 63, およびその前後の部分には TAAS と共通するような内容が述べられており、このような点にも着目した総合的な分析が必要かと思われる。この点については、2012 年 6 月 30 日の第 63 回日本印度学仏教学会学術大会の際に、大谷大学の河崎豊氏よりご指摘いただいた。ここに記して感謝申し上げる。

〈略号〉

T (P) Pūjyapāda: *Tattvārthasūtra* (Bhāratiya Jñānapīṭha Mūrtidevī Jaina Granthamālā: Saṁskṛta Grantha no.13) 2nd ed., Vārāṇasī, 1971.

T (U) Umāsvāti: *Tattvārthasūtra* (Bibliotheca Indica), Calcutta, 1903.

PRP Umāsvāti: *Praśamaratiprakaraṇa* → **T (U)**.

ŚrPr Umāsvāti: *Śrāvakaṣṭakaprajñapti* (Bhāratiya Jñānapīṭha Mūrtidevī Jaina Granthamālā: Prākṛta Grantha no.8) 2nd ed., New Delhi, 1999.

ŚrPrV Haribhadra: *Śrāvakaṣṭakaprajñaptivṛtti* → **ŚrPr**.

ŚĀS 3 *Śrāvākācārasaṁgraha* vol.3 (Jīvarāja Jaina Granthamālā: Hindī Vibhāga no.29), Solāpūr, 2003.

Umāsvāti に帰せられる 4 つのシュラーヴァカ・アーチャーラ文献 (堀 田) (223)

Śr (U) Umāsvāmin: *Umāsvāmiśrāvākācāra* → ŚĀS 3.

〈参考文献〉

金倉圓照 [1944] 『印度精神文化の研究—特にチャイナを中心として—』, 培風館 (東京).
 ヴィンテルニッツ [1976] 『ジャイナ教文献—インド文献史第四巻』, 中野義照訳, 日本
 印度学会 (和歌山).

Bronkhorst, Johannes [1985] “On the Chronology of the Tattvārtha Sūtra and Some Early
 Commentaries,” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für Indische Philosophie*
 XXIX, pp.155–184.

Granoff, Phyllis [1989] “Jain Lives of Haribhadra: An Inquiry into the Sources and Logic of the
 Legends,” *Journal of Indian Philosophy* 17, pp.105–128.

Jaini, P. S. [1979] *The Jaina Path of Purification*, Delhi: Motilal Banarsidass.

同 [2001] “The Disappearance of Buddhism and the Survival of Jainism in India,” *Collected
 Papers on Buddhist Studies*, Delhi: Motilal Banarsidas. (*A Study in Contrast, Studies in History of
 Buddhism*, ed. A. K. Narain, Delhi, 1980 からの再録)

Jacobi, Hermann [1906] *Eine Jaina-Dogmatik: Umāsvāti's Tattvārthādhigama Sūtra*, Leipzig: F.
 A. Brockhaus.

同 [1944] “Haribhadra's Age, Life and Works,” *Dhūrtākhyāna of Haribhadra*, (Singhī Jain
 Granthamālā no.19), pp.XV–XXIV, Bombay: Bhāratiya Vidyā Bhavana.

Jinavijaya [1988] *Haribhadrasūri kā Samaya Nirṇaya*, (Pārśvanātha Vidyāśrama Granthamālā
 no.47), Vārāṇasī: Pārśvanātha Vidyāśrama Śodha Saṁsthāna.

Mitra, R. C. [1954] *The Decline of Buddhism in India*, (Visvabharati Studies no.20), Calcutta:
 Visvabharati.

Williams, R. [1963] *Jaina Yoga: A Survey of the Mediaeval Śrāvākācāras*, (London Oriental
 Series no.14), London: Oxford University Press.

同 [1965] “Haribhadra,” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies University London*
 28.1, pp.101–111.

〈キーワード〉 徳戒, 学習戒, *Tattvārthādhigamasūtra*, *Praśamaratiprakaraṇa*, *Sāvayapan-*
natti, *Umāsvāmiśrāvākācāra*

(東京大学死生学・応用倫理センター特任研究員)